

「人の 10 倍努力して、やっと人並み」 ChatGPT で清書

私は、小学校 1 年生の通知表で体育の評価が「1」でした。高校を卒業するまで、その成績は「1」か「2」のまま。運動に関してはずっと苦手意識がありました。

高校時代にはバスケットボール部に所属していましたが、ガードの練習中、手を広げて横に動いた姿を見て「欽ちゃん走りみたい」と笑われたのを、今でも覚えています。そんな私ですが、半年後にはイボ痔を患って部活をやめることになってしまいました。

そんな中、体育の授業で唯一得意だったのが「創作体操」でした。ある日、男子だけの授業で私が創作体操を発表すると、発表が終わった瞬間、背後から拍手が沸き起こりました。振り返ると、女子全員が見ていたらしく、彼女たちが拍手を送ってくれていたのです。さらに先生からも褒められ、そのときの嬉しさは今でも鮮明に覚えています。

大学は理工学部を卒業しましたが、当時はオイルショックの影響で製造業の採用が冷え込んでいました。そこで「製造から販売まで一貫して行う会社」を探し、外食産業で成長中だった「サンドイッチのグルメ」という中小企業に就職を決めました。正社員 150 人ほどの会社でした。

飲食業は初めての経験。入社当初はパートの方やベテランのアルバイトから厳しく叱られることも多くありましたが、必死に努力を重ね、1 年後には店長に昇進しました。不器用ながらも、切れる包丁なら人並みに、素早くサンドイッチをカットする技術だけは身につけることができました。

ただ、私は包丁を研ぎすぎる癖がありました。その結果、すぐに摩耗してしまい、新しい包丁を本社に要求したところ、「研ぎすぎです」と叱られました。規則では「包丁を研ぐのは 1 日 1 回」とされていたのです。

それでも、私が任された店舗は、それまで 10 年間ずっと赤字続きだったお店。私は 1 年で黒字化に成功し、2 年目には 23 店舗中、前年伸び率がほぼ最下位から 2 位まで押し上げました。包丁ぐらいケチらずに支給してくれても、と思ったこともあります。

器用な人は、1 日 1 本どころか、包丁を研がない日もあるかもしれません。しかし、切れない包丁は余計な力が必要になり、怪我をしたときに大怪我につながる可能性があります。一方、よく研がれた包丁なら、多少の切り傷はあっても大事に至らないのです。

器用な人が 1 日 1 回なら、不器用な私は 1 日 3 回、3 本の包丁を研ぐ。それが私にとっての“人の 10 倍の努力”です。

人にはそれぞれ得意・不得意があります。大切なのは、自分の欠点をしっかり自覚し、それにどう向き合い、努力するかだと私は思います。